（別紙２）

論文審査結果の要旨

氏名　河原温

本論文「中世フランドルの都市と社会　—慈善の社会史—」は、中世ヨーロッパにおける慈善活動の在り方を理解するために、中世フランドル地方の慈善・救貧組織を分析・検討した研究である。中世ヨーロッパにおいては病と貧困はごくありふれた現象であり、それに対処するための集権的な組織や制度は整備されていなかったが、教会、修道院、王権、都市などが慈善施設を建て、病人や貧者を救済していた。中世フランドル地方の都市ヘントでも、12 世紀から 15 世紀前半に様々な慈善施設が建てられ、貧者救済に大きな役割を果たしていた。河原氏は、これらの慈善施設に焦点を当て、ヘントにおける慈善の在り方を検証すると同時に、救貧と福祉をめぐる社会意識の変容過程を分析している。

本論文は、河原氏が 1980 年代後半から 90 年代末までの約 15 年のあいだに公表した主要論考を集成したものだが、同氏の問題意識と全体の見通しを論じた序章が冒頭に置かれ、新しく書き下ろした論考が第三章として加えられている。補論には英語の論文が含まれているが、全体としてまとまった博士論文となっている。

中世フランドル都市ヘントの慈善施設に焦点を当てた第 1 部では、中世フランドル都市史・社会史の研究動向をヘントを中心に論じた後、12 世紀以後設立された施療院・癩施療院、教区単位の救貧組織である「貧者の食卓」、兄弟団などの活動を検討している。規約、会計簿、会員名簿、都市参審人文書などのラテン語一次資料を利用し、これら慈善施設・組織の成立と展開、変容過程を分析すると同時に、慈善活動の実態を明らかにしている。

第 2 部では、中世後期にフランドル都市当局が孤児に対してどのような政策を行ったかを慣習法や条例、孤児に関する資産記録、都市会計簿などを用いて検討し、条例や人文主義者の著作を利用して都市の社会政策を論じている。

本論文では、中世フランドル都市ヘントの慈善施設の実態が多様な角度から詳細に検討され、都市と慈善施設との関係、慈善活動に対する政策の変容過程が明らかにされている。この研究によって、次のような新しい知見がもたらされた。まず、ヘントの慈善施設の設立時においては、都市当局の主導性が認められること。この点はすでに一部の研究者によって指摘されていたが、その説を実証的に補強し、教会組織の役割を過大評価してきた従来の研究への批判となっている。また、慈善施設の管理者の職が社会的名誉とみなされ、都市の支配的な役職へのステップとされていたことなど、慈善施設と有力市民との密接な関係が明らかとなった。さらに、中世後期以後、都市当局によって、慈善施設を集権化する政策が推し進められていた実態が明らかとなった。

本論文は、ヨーロッパの最新の研究成果を取り入れ、一次資料の分析に基づいて出された優れた研究である。審査委員会では、わずかながら概念規定が必ずしも十分ではないと思われる箇所が指摘された。しかし、いずれも本論文の価値を大きく損なう性格のものではない。

従って、審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値すると判断した。